

集曲小情抒

出ひ思

秋 白 原 北

明治四十四年五月二十日印刷
明治四十四年六月五日發行

正價九十錢

著者 北原 白 秋

發行者 西村 寅次郎
京橋區南傳馬町三丁目十番地

印刷者 横田 五十吉
神田區松下町七八番地

不許
複製

發行所

東雲堂書店

東京市京橋區南傳馬町三丁目十番地
電話只機一六三九、振替五六一四番

わが生ひたち

……時は逝く、何時しらす柔かに影してぞゆく、

時は逝く、赤き蒸汽の船腹の過ぎゆくごとく。

(過ぎし日第二十)

1

時は過ぎた。さうして温かいかりむぎ苳麥のほめきに、赤い首くびの螢に。或は青いとんぼの眼に、黒猫の美しい毛色に、謂れなき不可思議の愛着を寄せた私の幼年時代も何時の間にか慕はしい「思ひ出」の哀歡となつてゆく。

捉へがたい感覺の記憶は今日もなほ私の心を苛^{いら}だたしめ、恐れしめ、歎かしめ苦しませる。この小さな抒情小曲集に歌はれた私の十五歳以前の *Life* はいかにも幼稚な柔順^{なつと}しい、然し飾氣のない、時としては淫婦の手を恐るゝ赤い石竹の花のやうに無智であつた。さうして驚き易い私の皮膚と靈とはつねに蠢^{きりぎりす}斯の薄い四肢のやうに新しい發見の前に喜び顫へた。兎に角私は感じた。さうして生れたまゝの水々しい五官の感觸が私にある「神秘」を傳へ、ある「懷疑」の萌芽を微かながらも泡立たせたことは事實である。さうしてまだ知らぬ人生の「秘密」を知らうとする幼年の本能は常に銀箔の光を放つ水面にかのついついと跳れてゆく水すましの番ひにも震慄^{おそ}いたのである。

尤も、私は過去追憶にのみ生^いきんとするものではない。私はまたこの現在の生活に不満足な爲めに美しくい過ぎし日の世界に、懐かしい靈の避難所を見出さうとする弱い心からかういふ詩作にのみ耽つてゐるでもない。「思ひ出」は私の藝術の半面である。私は同時に「邪宗門」の象徴詩を公にし、今はまた「東京景物詩」の製作にも従ふてゐる。従てその一面をのみ觀て、輕々にその傾向なり詩風なりを速斷せらるゝほど作者に取つて苦痛なことではない。如何なる人生の姿にも矛盾はある。影の形に添ふごとく、開き盡した牡丹花のかげに昨日の薄あかりのなほ顫へてやまぬやうに、現實に執

する私の心は時として一碗の查古律ちよこりつに蒸し熱い郷土のにほひを嗅ぎ、幽かな泪芙藍さふらんの凋れにある日の未練を残す。見果てぬ夢の歎きは目に見えぬ銀の鎖の微かに過去と現在とを縫いて慄くやうに、つねに忙たゞしい生活の耳元に啜り泣く。さはいへ此集の第三章に収めた「おもひで」二十篇の追憶體は寧ろ「邪宗門」以前の詩風であつた。まだ現實の痛苦にも思ひ到らず、ただ羅漫的な氣分の、何となき追憶に耽つたひとしきりの夢に過ぎなかつた。さりながら「生の芽生」及「Jonka Johnの悲哀」に輯めた新作の幾十篇には幼年を幼年として、自分の感覺に抵觸し得た現實の生そのものを拙ないながらも官能的に描き出さうと欲した。従つて用ゐた語彙なり手法なりもやはり現在風にして試みたのである。畢竟自叙傳として見て欲しい一種の感覺史なり性慾史なりに外ならぬ。實際私は過去を全く今の自分から遊離したものととして追慕するよりも、充實した現在生活の根底を更に力強く印象せしめんが爲に、兎に角過去といふわが第一の烙印を自分で力ある額の上に烙きつけやうと欲したのである、とはいふものゝ、私はなほこの小さな詩集の限りある紙面に於て企畫した事の十分の一も描寫し得なかつたのを悲しむ、幼ない昔は兎に角秘密多き少年時代の感情生活はまだく複雑であり神經的である。私はなほ何らかの新らしい形式の上にその切ないほど怪しかつた感覺の

負債を充分に償ひ得べき何らかの新しい機會の來らんことを待つ。

「斷章」の六十一篇は「邪宗門」と同時代の小曲であつてその以後の新風ではない。それは恰度強い印象派の色彩のかげに微かなテレビン油の潤りのさまよふてゐるやうに彼の集のかげに今なほ見出されずして頭へてゐたものである。私はかの私の抒情の「歌」といふにこの「斷章」のやうな仄かな藝術品が「邪宗門」や「東京景物詩」やその他の異なつた象徴詩の間にも、なほ純なるわかき日の悲しみを頼りなく伴奏しつゝあつた事をせめては首肯して欲しいのである。

私は兎に角、可憐なさうして手ごろの小さい抒情小曲集を、私のなつかしい人々の手に献げたいと思つて、なるべく自分に親しみの深い、穉い時代の「思ひ出」を茲に集めた。従て私の生ひたちなり、生れた郷土の特色なり、豫め多少は知つて戴く必要がある。

2

私の郷里柳河は水郷である。さうして靜かな廢市の一つである。自然の風物は如何にも南國的であるが、既に柳河の街を貫通する數知れぬ溝渠（ほりわり）のほひには日に日に廢

れてゆく舊い封建時代の白壁が今なほ懐かしい影を映す。肥後路より、或は久留米路より、或は佐賀より筑後川の流を超えて、わが街に入り来る旅びとはその周囲の大平野に分岐して、遠く近く龍銀の光を放つてゐる幾多の人工的河水を眼にするであらうさうして歩むにつれて、その水面の隨所に、菱の葉、蓮、眞菰、河骨、或は赤褐黄緑その他様々の浮藻の強烈な更紗模様のなかに微かに淡紫のウオタアヒヤシンスの花を見出すであらう。水は清らかに流れて廢市に入り、廢れはてた *Woman's* 屋（遊女屋）の人もなき厨の下を流れ、洗濯女の白い洒布に注ぎ、水門に堰かれては、三味線の音の緩む晝すぎを小料理の黒いダアリヤの花に歎き、酒造る水となり、汲水場くみづばに立つ湯上りの素肌しなやかな肺病娘の唇を嗽ぎ、氣の弱い鶯の毛に擾され、さうして夜は觀音講のなつかしい提燈の灯をちらつかせながら、樋みづを隔て、海近き沖ノ端おきばたの鹹川しほがはに落ちてゆく、靜かな幾多の溝渠はかうして昔のまゝの白壁に寂しく光り、たまたま芝居見の水路となり、蛇を奔らせ、變化多き少年の秘密を育む。水郷柳河はさながら水に浮いた灰色の柩である。

*

折々の季節につれて四邊の風物も改まる。短い冬の間にも見る影もなく汚ぐれ果てた

田や畑に、刈株のみが鋤きかへされたまゝ色もなく乾き盡くし、羽に白い斑紋を持つた怪しげな高麗烏かうけがらす（この地方特殊の鳥）のみが廢れた寺院の屋根に鳴き叫ぶ、さうして青い股引をつけた櫛はじの實採りの男が靜かに暮れてゆく卵いろの梢を眺めては無言に手を動かしてゐる外には、展望の曠い平野丈に何らの見るべき變化もなく、凡てが陰鬱な光に被はれる。柳河の街の子供はかういふ時幽かなシユブタはえ（方言鰐はえの一種）の腹の閃めきにも話にきく生膽取いきどりの青い眼つきを思ひ出し、海邊の黒猫はほゞけ果てた白い穗の限りもなく戦いでゐる枯葦原の中に、ちつと蹲つたまゝ、過ぎゆく冬の囁きに晝もなほ耳かたむけて死ぬるであらう。

*

いづれにもまして春の季節の長いといふ事はまた此地方を限りなく悲しいものに思はせる、麥がのび、見わたす限りの平野に黄ろい菜の花の毛氈が柔かな軟風に薰り初めるころ、まだ見ぬ幸を求むるためにうらわかい町の娘の一群は笈に身を籠め、哀れな巡禮の姿となつて、初めて西國三十三番の札所を旅して歩る（巡禮に出る習慣は別に宗教上の深い信仰からでもなく、單にお嫁め入りの資格としてどんな良家の娘にも必要であつた。）その留守の間にも水車は長閑かに廻り、町端れの飾屋の爺は大きな籠甲

縁の眼鏡をかけて、怪しい金象眼の愁にチンカチと鎚を鳴らし、片思の薄葉鐵職人はぢり／＼と赤い封蠟を溶かし、黄色い支那服の商人は生溫い挨拶の言葉をかけて月毎を覗き初める。春も半ばとなつて菜の花もちりかゝるころには街道のところどころに木蠟を平準して干す畑が蒼白く光り、さうして狐憑の女が他愛もなく狂ひ出し、野の隅には粗末な蓆張りの圓天井が作られる。その芝居小屋のかけをゆく馬車の喇叭のなつかしさよ。

さはいへ大麥の花が咲き、からしの花も實となる晩春の名残惜しさは青くさい芥子の莠や新らしい蠶豆の香ひにいつしかとまたまぎれてゆく。

まだ夏には早い五月の水路に杉の葉の飾りを取りつけ初めた大きな三神丸の一部をふと學校がへりに發見した沖ノ端の子供の喜びは何に譬へやう。艦の方の化粧部屋は蓆で張られ、昔ながらの廢れかけた舟舞臺には櫻の造花を隈なくかざし、欄干の三方に垂らした御簾は彩色も褪せはてたものではあるが、水天宮の祭日となれば粹な町内の若い衆が紺の半被に棹さゝれて、幕あひには笛や太鼓や三味線の囃子面白く、町を替ゆるたびに幕を替え、日を替ゆるたびに歌舞伎の藝題もと替えて、同じ水路を上下すること三日三夜、見物は皆あちらこちらの溝渠から小舟に棹さして集まり、華やかに

XVI

水郷の歡を盡くして別れるものゝ、何處かに頽廢の趣が見えて祭の濟んだあとから夏の哀れは日に日に深くなる。

この騒ぎが靜まれば柳河にはまたゆかしい螢の時季が来る。

あの眼の光るは

星か、螢か、鵜の鳥か、

螢ならばお手にとろ、

お星様なら拜みませう……

をさな

穉い時私はよくかういふ子守唄をきかされた、さうして恐ろしい夜の闇にをびえな

がら、乳母の背中せなかから手を出して例の首の赤い螢を握りしめた時私はどんなに好奇の

心に顫へたであらう。實際螢は地方の名物である。馬鈴薯の花さくころ。街の小舟は

また幾つとなく矢部川の流を溯り初める。さうして甘酸ゆい燐光の息するたびに、あな

あなと眼めに泌しみる螢籠に美くしい假寢かりねの夢を時たまに閃めかしながら水のまにまに夜

をこめて流れ下るのを習慣とするのである。

XVII

長い霖雨の間に果實の樹は孕み女のやうに重くしなだれ、ものゝ卵はねばぐと渚水^{みづ}のむじな藻^もにからみつき、蛇は木にのぼり、眞菰は繁りに繁る。柳河の夏はかうして凡ての心を重く暗く腐らしたあと、池の邊^{ほとり}に鬼百合の赤い閃めきを先だて、焦くが如き暑熱を注ぎかける。

日光の直射を恐れて羽蟻は飛びめぐり、溝渠には水涸れて惡臭を放ち、病犬は朝鮮薊^{あじさい}の紫の刺に後退りつゝ咆え廻り、蛙は蒼白い腹を仰向けて死に、泥臭い鮎^{あたま}のあたまは苦しさに泡を立てはじめ。七八月の炎熱はかうして平原の到るところの街々に激しい流行病^{はやりやまい}を仲介し、日ごとに夕焼の赤い反照を浴びせかけるのである。

この時、海に最も近い沖ノ端の漁師原^{りようしばら}には男も女も半裸體のまゝ紅い西瓜をむさぼり、石炭酸の強い異臭の中に晝は癡れ、夜は病魔退散のまじなひとして廢れた街^{まち}の中、或は堀^{ほり}の柳のかげに BANKO (椽臺) を持ち出しては盛んに花火を揚げる。さうして朽ちかゝつた家々のランプのかげから、死に瀕^{ひん}した虎刺拉患者^{こんらくわんじや}は恐ろしさうに蒲團^{はだ}を匍ひだし、ただちと薄^{うす}あかりの中に色變^{いろか}えてゆく五色花火のしたゝりに疲れた瞳を集める。

焼酎の不攝生に人々の胃を犯すもこの時である。犬殺しが歩^あるき、巫女^{みこ}が酒倉に

XVIII

見えるのもこの時である。さうして雨乞の思ひ思ひに白粉をつけ、紅い隈どりを凝らした假裝行列の日に日に幾隊となく續いてゆくのもこの時である。さはいへまた久留米緋をつけ新らしい手籠を擁えた菱の實賣りの娘の、なつかしい「菱シヤンナウ」の呼聲をきくのもこの時である。

*

九月に入つて登記所の庭に黄色い鶏頭の花が咲くやうになつてもまだ虎刺拉は止む氣色もない。若い町の辯護士が忙しさに粗末な硝子戸を出入りし、蒼白い藥種屋の娘の亂行の漸く人の噂に上るやうになれば秋はもう青い濫柿を搗く酒屋の杵の音にも新らしい匂の爽かさを忍ばせる。

祇園會が了り秋もふけて、線香を乾かす家、からし油を搾る店、パラピン蠟燭を造る娘、提燈の繪を描く義太夫の師匠、ひとり飴形屋（飴形は飴の一種である、柳河特殊のもの）の二階に取り残された旅役者の女房、すべてがしんみりとした氣分に物の哀れを思ひ知る十月の末には、先づ秋祭の準備として柳河のあらゆる溝渠はあらゆる市民の手に依て、一旦水門の扉を閉され、水は干され、魚は掬はれ、腥くさい水草は取り除かれ、溝どろは奇麗に浚ひ盡くされる。この「水落ち」の楽しさは町の子供の何に

も代へ難い季節の華である。さうしてこの一騒ぎのあとから、また久闊ぶりに清らかな水は廢市に注ぎ入り、楽しい祭の前觸が、異様な道化の服裝をして、喇叭を鳴らし拍子木を打ちつゝ、明日の芝居の藝題を面白ろをかしく披露しながら町から町へと巡り歩るく。

祭は町から町へ日を異にして準備される、さうして彼我の家庭を擧げて往來しては一夕の愉快なる團欒に美くしい懇親の情を交すのである。加之、識る人も識らぬ人も酔うては無禮講の風俗をかしく、朱樂の實のかげに幼兒と獨樂を回し、月ごとに酒をたづねては浮かれ歩るく。祭のあとの寂しさはまた格別である、野は火のやうな燼紅葉に百舌がただ啼きしきるばかり、何處からともなく漂浪ふて來た傀儡師の肩の上に、生白い華魁の首が、カツクカツクと眉を振る物凄さも、何時の間にか人々の記憶から掻き消されるやうに消え失せて、寂しい寂しい冬が來る。

＊

要するに柳河は廢市である。とある街の辻に古くから立つてゐる圓筒狀の黒い廣告塔に、折々、西洋奇術の貼札が紅いへらへら踊の怪しい景氣をつけるほかにはよし今のやうに、アセチリン瓦斯を點け、新たに電氣燈をひいて見たところで、格別、これは

といふ變化も凡ての沈滞から美くしい手品^{てじな}を見せるやうに容易く蘇^{よみがへ}らせる事は不可能であらう。ただ偶々^{たま}に東京がへりの若い齒科醫がその窓の障子に氣まぐれな赤い硝子を入れただけのことで、何時しか屋根に薊の咲いた古い旅籠屋にはほんの商用向の旅人が殆ど泊つたけはひも見せないで立つて了ふ。ただ何時通つても白痴の久たんは青い手拭を被つたまゝ同じ風に同じ電信柱をかき抱き、ボンボン時計を修繕^{なは}す禿頭は硝子戸の中に俯向^{うつむ}いたぎりチツクタツクと音^{おと}をつまみ、本屋の主人^{あるに}は蒼白い顔をして空をたゞ凝視^{みつ}めてゐる。かういふ何の物音もなく眠つた街に、住む人は因循^{おとな}で、ただ柔順^{おとな}しく、僅に Gonshan (良家の娘、方言)のあの情の深さうな、そして流暢な、軟かみのある語韻の九州には珍らしいほど京都風なのに阿蘭陀訛^{とら}の溶け込んだ夕暮のささやきばかりがなつかしい。風俗^{みだ}の淫^{みだ}らなのひきかへて遊女屋のひとつも残らず廢れたのは哀れぶかい趣のひとつであるが、それも小さな平和な街の小さな世間體を恐るゝ——利發な心が卑怯にも人の目につき易い遊びから自然と身を退くに至つたのであらう。いまもなほ黒いダアリヤのかけから、かくれ遊びの三味線は晝もきこえて水はむかしのやうに流れてゆく。

柳河を南に約半里ほど隔てて六騎の街沖ノ端がある。(六騎とはこの街に住む漁夫の諱名であつて、昔平家没落の砌に打ち洩らされの六騎がここへ落ちて來て初めて漁りに従事したといふ、而してその子孫が世々その業を繼襲し、繁殖して今日の部落を爲すに至つたのである。)畢竟は柳河の一部と見做すべきも、海に近いただけ凡ての習俗もより多く南國的な、怠惰けた規律のない何となく投げやりなところがある。さらしてかの柳河のただ外面に取すまして廢れた面紗のかげに淫らな秘密を匿してゐるのに比ぶれば、凡てが露で、元氣で、また華やかである。かの巡禮の行樂、虎列拉避けの花火、さては古めかしい水祭の行事などおほかたこの街特殊のものであつて、張のつよい言葉つきも淫らに、ことにこの街のわかい六騎は溫ければ漁り、風の吹く日は遊び、雨には寝ね、空腹くなれば食ひ、酒をのみては月琴を彈き、夜はただ女を抱くといふ風である。かうして宗教を遊樂に結びつけ、遊樂のなかに微かに一味の哀感を繼いでゐる。觀世音は永久にうらわかい町の處女に依て齋がれ(各の町に一體づつの觀世音を

祭る、物日にはそれぞれある店の一部を借りて開帳し、これに侍づくわかい娘たちは参詣の人にくる豆を配り、或は小屋をかけているいろの俵をする。さうしてこの中の資格は處女に限られ、縁づいたものは籍を除かれ、新しい妙齡のものが代つて入る。天火のふる祭の晩の神前に幾つとなくかがぐる牡丹に唐獅子の大提灯は、またわかい六騎の逞ましい日に焼けた腕に献げられ、霜月親鸞上人の御正忌となれば七日七夜の法要は寺々の鐘鳴りわたり、朝の御講に詣づるとは、わかい男女夜明まへの街の溝石をからころと踏み鳴らしながら、御正忌参らんかん……の淫らな小歌に浮かれて嬉曳の樂しさを佛のまへに祈るのである。

沖ノ端の寫眞を見る人は柳、梅檀、柘榴、櫨などのかげに、而も街の眞中を人工的水路の、水もひたひたと白く光つては芍薬の根を洗ひ洗濯女の手には波紋を畫く夏の眞晝の光景に一種のある異國的情緒の微漾を感じるであらう。あの水祭はここで催され藍玉の俵を載せ、或は葡萄色の酒袋を香の滴るばかり積みかさねた小舟は毎日こゝを上下する。正面の白壁はわが叔父の新宅であつて、高い酒倉は藪の上部を現はすのみかうして、私の母家はこの水の右折して、終に二條の大きな樋に極まり、渦を卷いて鹹川に落ちてゆくその袂から、是に左したるところにある。

今は銀行となつたが、もとはやはり姻戚の阿波の藍玉屋ういだまやの生鼠壁なまこがへの隣に越太夫といふ義太夫の師匠が何時も氣輕な肩肌ぬぎの婆さんと差向ひで、大きな大きな提燈を張り代へながら、極彩色で牡丹に唐獅子や、櫻のちらしなどをよく描いてゐた藁葺きの小店と、それと相對して同じ様な生鼠壁の舊家が二つ並んでゐる。何れも魚問屋で右が醤油を造り、左が酒を造つた。その酒屋の、私は Tonka John (大きい坊ちゃん) 弟と比較していふ、阿蘭陀訛か。である。して、隣は矢張り祖父時代に岐れた北原の分家で、後には醤油醸造を止した。

南町の私の家を差覗く人は、薊たんぽぽや蒲生英たんぽぽの生えた舊い土藏づくりの朽ちかゝつた屋根の下に、濫い店格子を透いて、銘酒を満たした五つの朱塗の樽と、同じ色の樹のいくつかに目を留めるであらう。さうしてその上の梁はりの一つに、紺色の可憐な燕の雛が懷かしさうに、牡丹いろの頬をちらりと巢の外に見せて、ついついさ鳴いてゐる日もあつた。土間は廣く、店みせ全幅みせいつぱいの藥種屋式の硝子戸棚には疊なかつた山葵色わさびいろの紙が張つて、その中ほどの柱に阿蘭陀渡の古い掛時計が、まだ正確に、その扉の繪の、眼の青い、そして胸の白い女の横顔のうへに、チクタクと秒刻の優しい歩みを續けてゐた。その戸棚を開けると綠礬、硝石、甘草、肉桂、薄荷、ごくだめの葉、中には賣藥の版木等がしん